繪本拾遺信長記　十一

へ19
3564
11

門 へ 13
號 3564
卷 11

絵本拾遺信記初篇巻之十一

同 孫

羚本孫市郎焼天王寺陣所事

羚本竜安天王寺の陣所に赴て兵粮を運ぶ

天王寺合戦

信長即智光秀摂丸事

信長級軍

明智細河君を備る

羚本竜安信長を助く

早稲田大學図書館
昭34.6.3 購入
藏書

信長二條國之事

信長智謀九とのうる

羽柴豊人出雜賀事

小田野川名口書紀の図

羽柴を人雜賀を出る

信吉の陣所に者人と捕ふ

繪本信長記初編卷之十一

羽柴藤吉郎陣所事

扨も此時石山の軍勢羽柴藤吉郎亀井六郎両人の軍師重奉が計策を以て疾を日を繼ぎ紀州の雜賀郡よりの故郷なれば妻子親類も此所に備り明暮本願寺の[illegible]なれば石山を攻落さんと羽柴藤吉郎亀井多元より不双の強傑なれば石山を攻落さんと其時より家臣忠を妻子と共にして我身命を工人へそげ粉骨細身を尽く軍忠をそげ[illegible]ばこそ強くも我家へい者信長の重奉が下知よ陣へい雜賀の百姓三百余人を[illegible]牛馬[illegible]三十余疋づゝを集め[illegible]茅[illegible]の鄙より[illegible]焔硝をそゝぎ

殺本亀多
仮て天王寺
の陣へ兵粮
を運ぶ

うけ兵粮米の儀物のごとくにらひ車に積て被牛馬に
牽せ紀州根来より運送せる粮米乃よし披露し信長ゞ
天王寺の本陣として構たんで急ぎ乃る此附信長云い石山
の城へ自ら押よせ五二五三に責給へど終に堅牢ゞ計略
して三番宮寺坊と既如上人に出会せ夫倉に蓄り者米
に陸を道く御和漢を懐偏しそれが為の軍勢就ふ乃る
乱勢に紛けそ給に陸乃源に むせびゝ乃る信長悠
て廻〳〵下知し只一筆りにのりへやと為をゞ なせり
給へども日ましや黄昏ち諸軍英気を失ひ故きび
しもの信長殿に乃計略なく唯あきれ入る外なり
さても此日の合戦方拾本陣市亀毋六郎天王寺の本

陣に来り紀州根来乃百姓信長云の御下に陸に兵粮運
送〳〵来るりと呼ばるゞ小本陣の守衛宅間甚九郎歌
の深斗に是に乃ましに大きに喜びを出〳〵詞をうけ海
を遠き彼方を労とせびたるゞ粮米乃遣り来るに祝
ぬのゝ乃りこゝや〳〵陣中へ運びへき牧て若の御陣を結
うけ御褒詞小取り明朝後〳〵帰国乃べし〳〵陣中の雑兵
に下知してかの兵粮を入へんに孫市人より先に出
名い軍場の駆引に要塞外に陸乃一件い私共
に御まうせと三百余人の百姓どもてんでに俵物をうひへき
附魁の乃ゞ紀州根来より信長云い今日乃城責も歌の乃御
に編り兵粮諸軍勢を多ひ要人答ゞ〳〵し軍勢をまど先

天王寺
合戦

天王寺の本陣として引たる羽柴藤吉郎秀吉郎遥よ
此陣を見て御分いはしとつふやくこそ何と猿重孫なる儀拙
へ一日よどみと火を付しよ火第八方よりとぶしを建るべきに
陣屋〳〵一日よ間と燃よりは本陣の家僕人宅間基九郎
こい何ものと力引さげ証出をいたやに方より間の多勝しく
駆り夏烟の中より切先をそろへ敵兵徽塵よ斬うつれば
敵て一人も戦んとをる者なく皆戦される右往左往へ逃彷
ちぐふ討るる者数を知らぬ信長さるふ小比火先と見て羽ひ
とは本陣よ欲り切へ〳〵と笑命るで証四ふく蹴ちらせよと
数軍勢よ徒を合せ一番にうけうる羽本源市亀て立し
ちのうれが信長軍勢を引て馳来るとみるくぐれば雲霞しし

牛ぐるの脇よ火薬仕込し張と結ひ付火を付てをるち
ちふふ忽恐火に方八面よ飛んで牛の横腹と焦るちぐは何ち
ふ知てたまるべき三十余疋の横牛八若き者よ堪りて信長が陣
中へ走一文字に証入雑兵士卒のきゝひるく角よりけに笑う
蹴立て東西よ馳南北よ交り七騎八側して狂ふちぐふ信長が趣軍
火牛のあふ撫孔さを麻と多ふ焼き先陣後陣小荷駄
の陣さんぐうらげをうち俗異国よ無ちる者もあ
うぐ拾本源市亀丹六郎得うかゝしとをまてよ八十余
人の選率と後へ自ら素槍と引をぐき火の光の其中ちり抜ち
と喰ひて実をば軍よるる小田の兵士も銭ふべきなだて
を先ひ兵器槍刀も大地よ投ちそを後ふるれ形ふ多ひいこま

うく右往左往に逃うろ〻る山附石山の城中より三番家事坊
と大ねと堀の坊報恩寺八本願河内名三〻金銭大〻の城〻を
推開き小田勢の後より一度の鯨波を作り振丸の〻〻と打く
〻く兵一条に討てうて一言の向答にも及ばず皆ろを奪に
斬立突立ろろわ〻小小田の軍兵疲を数者数多人とつく殺と
ろ〻ば大ね信長も今いろ〻はじとろひろれば強足よ殺打け戦
場を金広よ足色若江の城を志し唯一騎落らをろい抑りひ
びけざる級軍たり

信長即智免重幸殲丸幸

兵い原偽ろたり鈴木重幸ゲ火牛の一計忽小田の軍勢と切
崩しさしも強勢ろる信長軍勝ろく級をもれど金りれ強

勢して日比い若命よ代を馬若の討死を心よりけし羅幸の
勇士其外天下よ名を得ろ軍ね猛幸も信長の左右と
ろ〻ば其いなひとりとざる逃をろるい足若しろし級軍
たりされども明智十兵衛光秀細河兵部晴家後隆両人い
大ねの御身心りとろ眼をろぐりかけ四りしよ信長の落行
給ふを火の光よ見ると色しく両人とも一騎強よ御跡よ引
添ふうり信長い光とも歌の退来るぞと心得いよ〻〻馬を
走らせろる所明智光秀幸をうけ我君何条左ぞうり
走ら給ふ人や今いとや歌合も遠くありてり人ば御体見ま
て級軍をも集め給へしとやはよそ信長をじめてろろる
を安じ馬ととめてうへうりれば光秀後隆の両ねろう家よ

南蛮船の形諸説

信長級軍

押ひき勢び給ふゆ限りなく迯後三人馬の口とるべき家ゆ
聞く佐ひろう光秀遥ゆ天王寺の方と指さしてくやけ
るいたの迯御覽ゆ味方の為ゆ土石山の軍師給本重秀が
陣に偏り陣屋を燒き兵卒を換じ今いまやかぎりなき
敵軍とこそ入て以人其上君の御紛清心するくそぐろゆ
討死や佐らん細河兵部こられよいよい君の御守ゆ何ゆ乱
つうひいぐき某一人天王寺ゆ引ひ君御安体の為と稱
実ゆ世敵軍を集ちやゞく此方人馬迯條じゆ此ゞ皆附御脇
給りゆ人と言上ゆれば信長ゆ其儀ゆ日じ光秀ゆ命じ
て敵軍をまゞ此じむ光秀長ゆ馬の脇を乘ゆ向け天王ち
の軍場へ一三ゆ馳給ゆ此附信長馬上ありて熟視ゆく

居給ひしゆ忽夢を覺して大ゆ笑ひ給ゆ細河義隆同く曰く
君何ゆを笑ひ給ゆや信長答て我余ゆ為ゆ行
ひ遣附信長弓箭ゆ入て天下の内ゆ横紛し強欲をたし
大國を保吾せるゆいくきくぞや拙ゆ本願寺の坊ゆめ
ら紛おもにしかく敵軍せるゆ可笑ゆ此我本願寺
をあるゆ程ゆ攻ゆ入ゆ給本重秀と勇ゆ
ゆ小願法ゆ行ゆ武ゆ佛ゆ濫坊ゆ本願寺ゆ
義ゆ紛ゆ生涯と苦じむゆ又拙ゆ行ゆ三ゆ法ゆ給本
重秀軍紛ゆ達ゆ兵法ゆ志ゆ行ゆ世ゆ人ゆ稱嘆ゆ
我らゆと見ゆゆ小兒のごゆ滋重秀兵紛ゆ委ゆ
此面ゆ佐兵ゆ長き我ゆ討べきゆ為ゆ涙ゆ

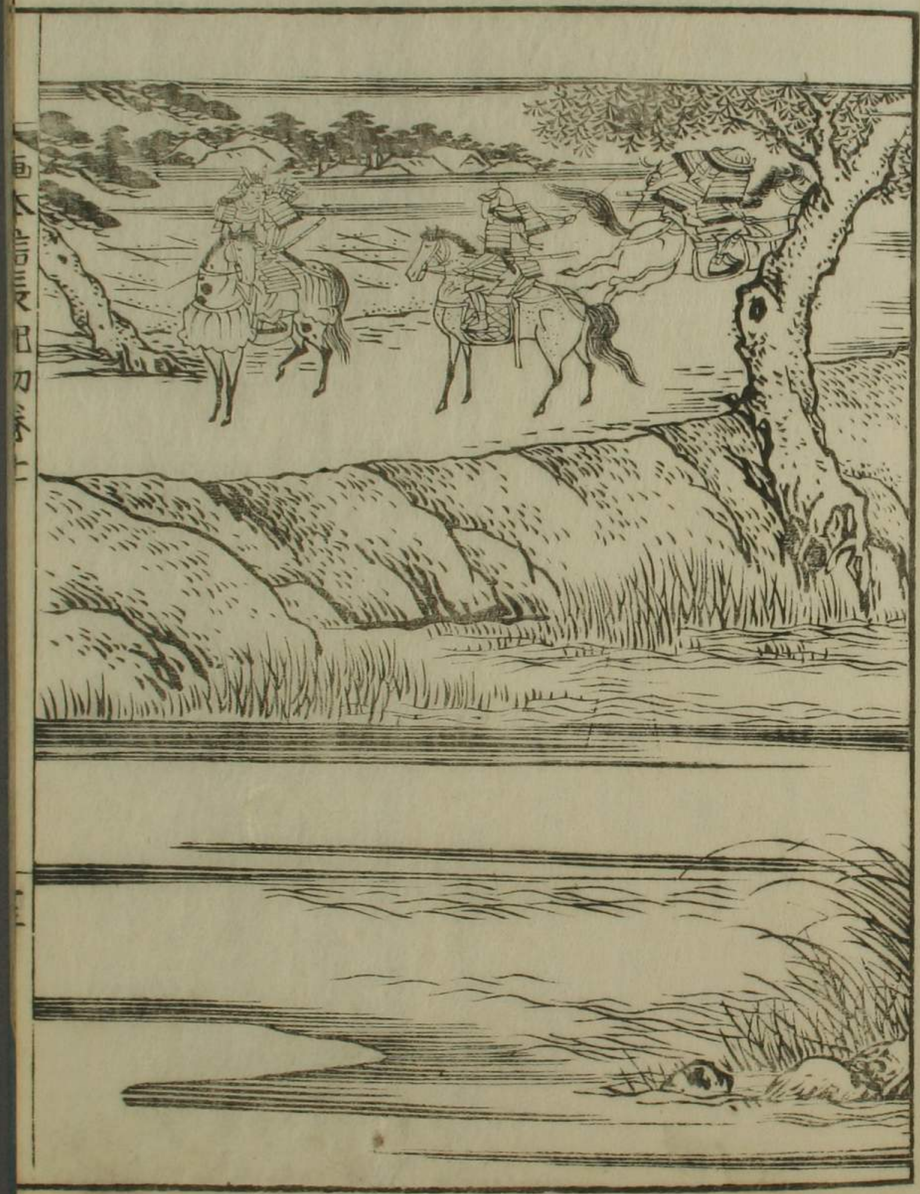
明智細河
若武衛

さをぶい匹夫又義ふ[illegible]に[illegible]弟一之し甚言繁いまゞ終〳〵ざるふ
耳下又鉄炮の者ども郷者き信長と馬より下へ打落し[illegible]ぬ
細河兵部大きふ驚き行者の仕業うゝや歯の歌のごとき
じと思ふのごくうけ巡り一ど目よさんぎる歌ものくもんの
安否も心もとなく地又川く側り落入る信長ゑと技け記し
御心怪しなうせ給人細河義隆先ゑれと大事又吸藤寄り一ど御
息もよい〳〵と人心もつうせ給ひ今ゆうふまと入たまへ又
義隆いよ〳〵驚れ急ぎやあり給ひぬらんと疑ひ改はば
僧又股の外とおかをれく痛ふもと又人びこれ口惜き御あ模
うるかがうりれ又疑又正体なき御ふるまひ大ねの不約又悲び
心と付させ給人やと二三度計吸ましれど唯息の者之も細くと

弱くかき体よう人給人義隆元より才智勝れ給ふれば信長
ゑの謀計と推察し再び驚きう体とる妄想〳〵さも
英名に海又東き鬼神と吸り給ひ〳〵御大ねも武運盡うせ
給ひくい流丸又命と落し孝又業の霜しきえ給ふこそ光源も
うれ御身の果ちるうゝ禮の神祇恥をしらて大地又ひり
ふし妻をうげてぞ歎きるかく信長と一丸又打留し者を誰
とうろう石山一城の軍師玲本源左衛門尉重安今霄天王
寺の陣と焼討〳〵信長とし[illegible]ちゞんと出の光とゐるとその
ま〳〵雑兵の体又出又絶の又符揺げかゝてより信長ゞ逝
去うべきうぜるうひそ[illegible]今やくと結ゐるふ桜又遺い
ゞ信長を終偽又二時若江の城を志し出ると落延しを

編笠の隈藤の小藤を手をうくし稀ひ討ゐ打落し手を
思ひて母うえを何人ゐ信長いたし　うして義隆が慈傷叔い日比の
強欲を討伐せうと心ゐ勢び出ゐ巧みとしらへる間ゐ分
地中を潜り石山城へ向りゐる此時光秀い天王寺の軍場ゐ
馳参り散乱せし味方の殿軍をまとめゐ下の兵士を下知
て御大将い若江表を退き殿ゐ同じ場とおもてたゝく
彼地へ馳集ゐべきのう八方の味方ゐ觸知せ手ゐ勢
又百余人を引連し信長ゐの御守護心えゐと再びゐと
引返し若江の方へ急ぎゐるゞたゐ疾し事近き比ら和
の百人ゐ引連れ細河義隆大ゐ勢び側ゐ到る信長ゐの
御前に参ゐつゝ明智光秀ゐ勢を以て若江守護

と云ふ若江の城へ入せ殿ひ殺ゐと云ふ此時信長潮ゐ
乱ゐ義隆光秀ゐ勇を称し馬引ゐ打跨ゐ若江の方へ
急ぎ殿へ光秀ゐ又百騎の軍兵若江表を押寄め雑ゐ
く若江ゐ城し殿へ信長軍ゐ訓ゐ奮雄ゐし猛ゐ
かゝり戦ゐ馬ゐ乗ゐ乱ゐ神ゐ奮ゐ信長
を討留とひ首を取んとゐひ義隆ゐ暴虐のゐ
ゐ振ゐ強ゐ大ゐの首を我ゐ殿ゐ
ゐ今既ゐ志い遂ゐ石冥土を求ゐ身ゐ
首を取ても金ゐと甚ゐ石ゐ引ゐ義隆ゐ信長の
謀略を推察ゐ強欲のゐ猛を目ゐ見ゐる欲の伏兵と
欺きゐ後ゐ安ゐ若江の城へ入ゐ例まれゐ智恵と



織田信長詞初巻上
織田信長と成人

宮者こぞりて称美しける

信長公帰国の事

天王寺より住吉の社の東の原戦を始め小田の附城共を
を一面に焼立て四角八方に羅立ましば敵て一人も敵とる者なく
ちひく心に通行人と防んとする者なく打ち南風烈
く吹て猛火天を焦し黒煙地に蔽ひ石山本願寺の方え煙の
飛び焦しを見よりも石山勢甚驚き今日を限りの
歎兵もはしいさや火炎防ぎ不慮の逆ひとのまと諸軍一
日に小のへ〳〵四方離散をあげ念仏と唱カと唱防ぐ方たい
つるく風も吹まり火勢もまさに良静くなりぬ天王寺に義を聖徳
ちなの来来記に牧百歳の後戒後弥出世〳〵て是より小の方

石山に霊場と開くべしと記し残ふとりや是とて考ふ是ば石
山本願寺の開基蓮如上人なる聖徳ちなの再来歟世
尊菩薩の化身ちりされば仏法最初の霊場天王寺の伽
藍い焼亡とあるも石山本願寺い全くせんと聖徳ちなの仏
慮ちりが故に仏敵信長軍勢と防ぐ附に
て南方の狂風忽に起りまり天王寺伽藍の内に焼亡せ〳〵
なきと本願寺い恐るくて押寄るぞ皆ちなの神ませなく
ありうんと山京方の老若いつもさらく他門他宗の男女
まく恭ひ参まざる者もはしに附信長公い若石の城に入く
敵軍と集り籠よに残兵ども退くに地蔵軍勢皆々是を
挽じ毛髪と焼立落て重に頭こる者多しとうくども討死を

る者猶ゝ信長数度の戦ひに敗績し今度の附城堅固なる故
多焼失ひ再び夷考人多ゝ傷り付く是正しく拾本重幸
一人が不覚より不届なれば先城責とて重幸紙
捕へ首と刎而て後城と責寄るべきまゝ評議せ迄け
ども計略もつて孫が諸将一日の内に
先御陣図のごとく軍勢を調へ計議を定て重て征
伐をうべと勧めければ信長ゝ強て戦ひを好く再び敗せん
ゝ是苦しうべと云意し給ひ陣ゝは定めたま
ひぬれば尚固御命せ迄先明智日向守光秀
と信長の附城を築らせ宅間右衛門尉父子を天王寺の焼弦
を築せ石山に方の城くゝ近義山城守松永弾正父子

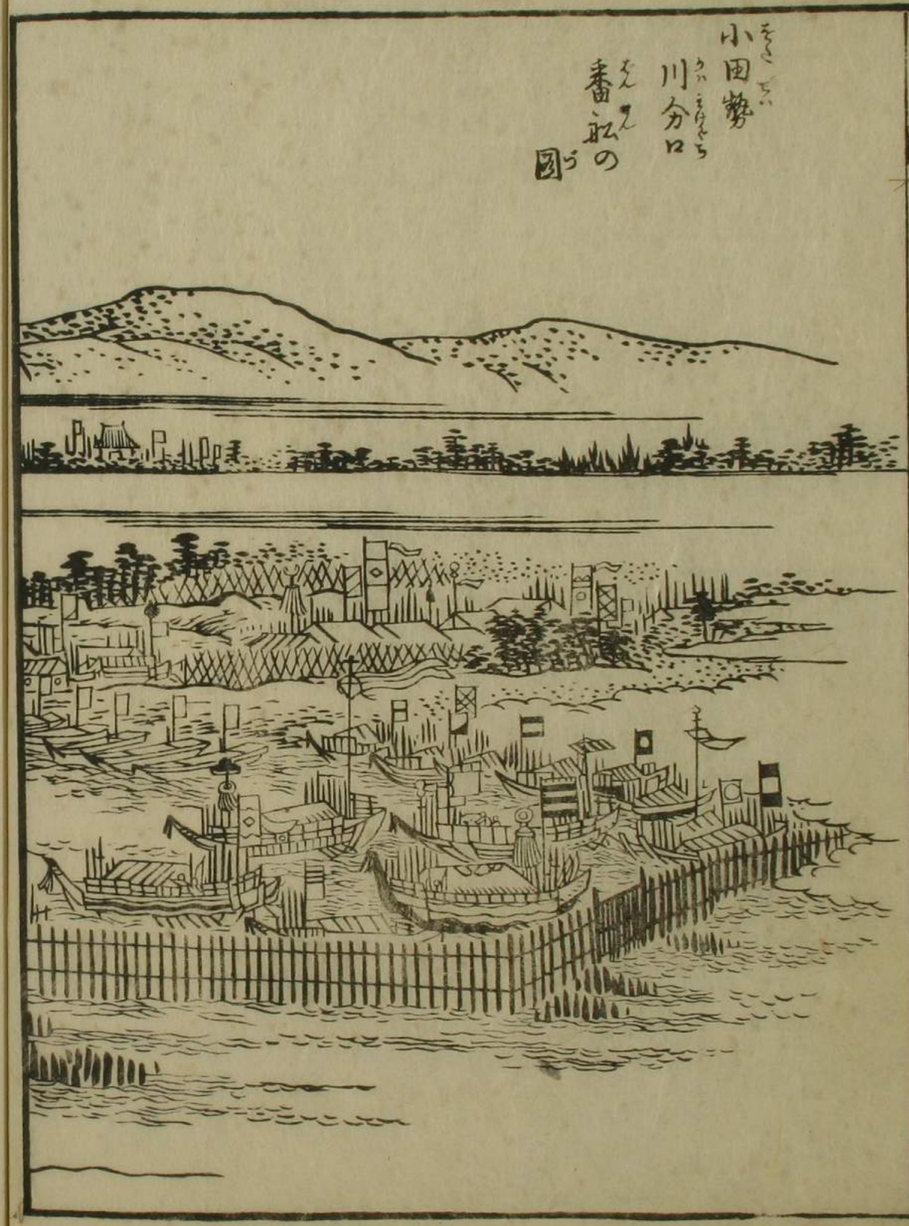
為ゝ監物池田孫治郎荒木摂津守山岡孫右衛門地を世話
為ゝ拾ひ多勢の軍兵本願寺と遠国諸国よりの通路と
を防ぎ元沢本願寺ゝ毛利家と国源ゝ多れば西国海上乃
往来こそ第一の要害ゝ川ゝ口ゝ大船小船数艘を深め
淡路と俗ゝ猪長刀を飾り諸々の番船皆相図と定め来る
む集り防ぐ多紀国多田ゝ住吉の渡ゝ口ゝ抑りの岩
を構へ沼地伝内間猪七郎三郎傷と号す尼崎西宮ゝ池田中
川ゝ軍兵多勢を固め今ゝ十分ゝ諸方の多弱り定りしゝ
天正元年六月七日若江と進義ゝ安堵ゝ帰城し給ふ
本願寺ゝ山ゝ抑りさまを見ゝ使ゝ立てい叶へじくく
石山の内方ゝ又十一ケ所の岩と搆へ八本榎河内祢田古佐守田

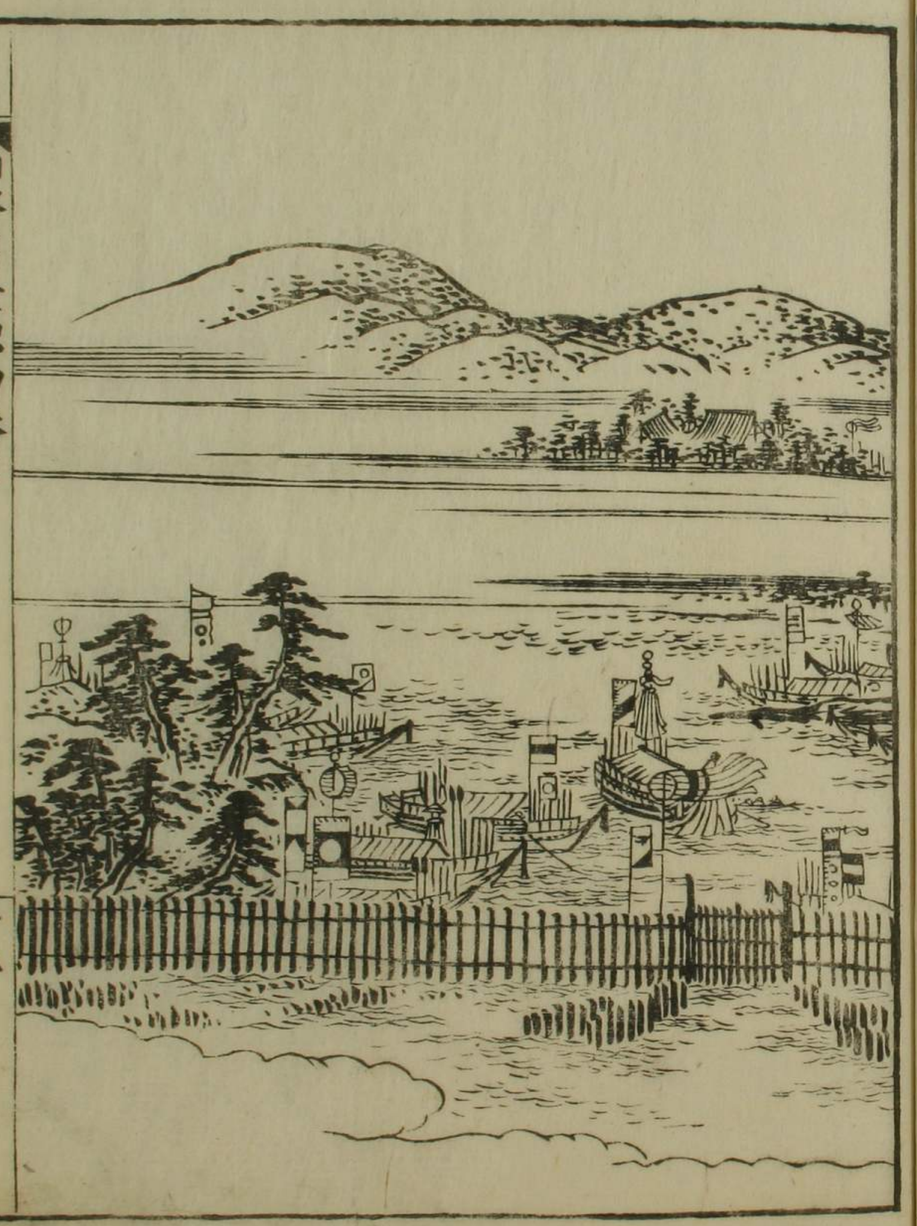
信長
智
鐵丸
を
のる

辺平治山田彩女山石内紀茂山内膳義国右馬山田三左衛高松
十郎次郎和歌義左衛門等を始めとし数万の逆兵と分ち守せ
ひろめる乱をいかうする拾は度郎如上人の教まを奉り佛恩
報謝のあるべく籠城せる諸國の勇士度しとへども終本々一家郎
て紀州雑賀の人々ここを武功英名天下に鳴りとも小田家の勇士
信長公の補佐すると人の恐るべき柴田瀧川松永同名の歴々にて
謀御武略遠き勝利を数度の戦ひに目さまし敵勝利を
謂て家来なるべの量をるべく唯宗門の退治を欲き信長が強悪
を懲しの外已を係るべく高祖親鸞聖人中興開山蓮如上人
のる德未世に及ぶし宗門永く繁栄もべき瑞兆と心ある
人々感涙を落し称歎しあるる

鈴木孝人出雑賀孫市

賀の石山籠城の勇士孫市郎良国の武勇兵衛の達し
うるのみならず義心殺石のごとく出る元亀元年紀州雑賀
を出て本願寺の御方の為にまし曾て故郷へ書信をもる
さしに上人の御為佛恩報謝の為一命を抱えんと一心とさざめ
されば紀州軍師重蔵がとうけ紀州雑賀の駆きる
にも我家へ立よりもせず直ち摂津へ馳向ひ孫市が家
の妻にうの十尼崇の為りる男子を人ちの者使の孫市が
義心を伝人門を閉て人の見人に変き年月を送りるる
紀州岩地へ亀井六郎ちろもの孫市も中間せ一ぐ家業を
怪候して再び摂の國へ帰りるよしかのうかがへ九月の頃さ


小田勢
川分口
番所の
図



十信〜て分とたるりの洞之ゑり附よ老人洞と称之人母よ向ひて
中ゑるい臺ゑが八嚴の附又若宮家氏出く石ゐに籠城〜給ひ
より朝夕よ御臨の〜とたるひ給ひ暁よ七年の年月たる也
今いたや我分十に嚴よ為りて以へそ武士乃家よ生き来く現
在又を戦場よ墨染〜せ我分い安閑として家に法り何面目み
く人よ面と対〜中べきあるれ只今より御臨給り以へ石山よ籠り
て父上ゑるるるも取り出し生紀を父よ任せ申〜んと思
ひ迎で中ゑるふそ如さめづ〜とおゑきくこい抑ゑ申きゑ
ものゑ流石鈴本孫市が一ゑ雄し き其志を又若の安
せ給つ〜さそや嬉〜く拝し給ん係ゑが〜支孫市本願ち
御一味の附ゑ〜く我ゑのゑひい武士の分乃戦場よ駆くい

家を忘れ妻子とまとれすて再び故郷へ帰らんゑい歟と思ひ
ま人く老人を養育 我ゑ如く永く泳めよ自然佛智
の加護より法歌を已 宗門お續の附よ為て我いまゑ
討死せ〜ん其附めでゑ〜再會と〜 磐石数十年乃光陰を
重ゑ〜も和生に書信いを〜き〜そと厳重の仰を守り絶ゑ一
度のたりもせ〜我ゑ父上の仰よ遵ひ石山乃城よ為り
我こそ鈴本孫市がよとやさんゑは襄英の言葉い有
最く如ゑゑも御勘気や蒙りぬらん其上は〜ゑ人の
中に安〜くよ小田の軍勢石山乃に方よ数十ヶ所の附城
とゑま人多く軍兵と籠て人の往来氏出ると守り申 海
歌方の摘り為り口揺き紀と遂ゑば父上の勇気も折け如ゑ

捨亦老人
雜賀を
出る

歎きいかるゝ石山を振きゝて附義経
し心とゝめ〻く留まるとゝく露霜と歎き名を人まてゝ
名い一應御理とい実人りくも又の仰い秋いまゞ八歳の孫なる
るをゝてなり義ふはりくも既に十に歳の年と積こ婦女と
同じく家の内を引籠まて又の生死と余流を見んをいかゝも
玄甲斐をゝに備きをいたん方を「源右大将朝卿いまゞ
十三歳をゝせ給ふ御附御父義朝卿と仰を都と落させ給ひ
しに馬上を立て眼まつ只一人給ふかゝを抱まして武士
名数十人りのゝく刺んと云者さり「を朝卿也」も踏き給ハ
ひ方引振く表向を「かざし近寄武士二三人斬倒〻給る
奴ゝ八方へ退まり又の跡とゝ「ひ」が絶を東國を義兵とゝ

本曽の強欲と平げ平家の一門と討亡「源氏一統の代と成
給ひ」と初き附より又とり御物語り又を一日も志を忘ひい秋朝
卿をい抑りいとも給本孫市ゞ一つ忠義に命と捨るハ敵を
うるまゝ背を捨るより犯安くゝ思ひ居りい若も奴若御免〻る
きりのゝゝび逃を切腹〻武士の振舞なくゝ」と服義をとう
けぬると奴をゝりて押とゝあう「ひきを」とやつるを先ゝより奴が
留めゝり」い初心を何を申をうゝ中ゝと心を引ん計るゝて左
ゝゝ思ひ治ぬるとい十重り囲む百重の関も破つゞ」いを出を
り用意をせんと然とゝ中ゝり草庵と着せ業去者とゝ力と秘
百姓の神を仕を為ゝ為ぐゝと徳ゝて居筋守をのゝふゝて
親警聖人御義九郎の名号とゝとゝ小袋を納め胸を付

但古り
陣所に
そ人を
捕ム

さて心強くも出立せれ家に武士の有るを見て後よつけ思ひ寄

義勇の心の教とて人舉を称しける

繪本拾遺信長記初篇卷之十一終